The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アンドレ・マルロー作品における影に関する考察
Author(s)	井上, 俊博
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26273
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕　アンドレ・マルロー作品における影に関する考察

学位申請者　　井上俊博

作家、アンドレ・マルローの作品は、第二次世界大戦以前及び大戦中に執筆された小説作品群、大戦中から戦後にかけ発表された芸術論に大別することが出来る。これまでのアンドレ・マルロー作品研究は主に、小説、芸術論とそれぞれのジャンルに分類し、分析が行われてきた。しかし、小説作品における死や運命といった主要なテーマは、芸術論においても小説同様主要なテーマであり、また、小説作品内では既に、芸術論の中で行われていた芸術を通じての文明比較、思想・宗教といった観点からの人間に関する考察が行われている。中でも注目すべきは、芸術論に見られた「芸術作品を撮影した写真を並列、比較する」という手法が、小説作品内において既に描かれている点である。

マルローは芸術論において写真、中でもモノクローム写真は彫刻や絵画といった多様な芸術作品を互いに接近させ、共通する様式の発見を可能とすると述べている。このモノクローム写真とは、被写体の像を明部と暗部、すなわち光と影に還元し、描き出すものである。また、マルローは小説作品内人物を描写する際、人体から生じる影を描くことで人物を描写する手法を数多く行っている。本論文は小説、芸術論双方におけるこの影に注目し、マルロー作品全体における作家の思想を明らかにすることを目的としている。

第1章では、芸術論における芸術作品の持つ意味について論じる。芸術論*Les Voix du silence*においてマルローは、古代ローマ芸術のフォルムが古代エジプトなどに伝播し、新たな形態を生むに至った過程について論じている。古代ローマ芸術の特徴はリアリズムに基づく高い再現性であるとマルローは指摘しており、その肖像画は写真的であると述べている。古代ローマは魂や死後の世界といった概念を保持しておらず、その肖像画は今日における一般的写真のようなものであったが、死後も続く魂の永生を信じる古代エジプトと出会い、モデルである死者を死後の世界へと結びつけるファイユームの肖像画へと変化していく。この変化は、芸術作品の諸フォルムを死後の世界へと死者を結びつける古代エジプトの様式により可能となったとマルローは考えている。しかし古代エジプト文明など過去の諸芸術作品を生んだ文明が潰えたと共に、死者の魂の永生を可能とするといった芸術作品の製作当初の意味は失われ、後に発掘された芸術作品は科学的研究の対象としてのオブジェへと、その意味を変化させていく。

マルローは、文明はそれぞれ固有の死に対する観念を保持しており、芸術作品創造の根底には人間が死に対して持つ感情が存在していたと考えている。この死への感情を彼は「影」と表現しており、芸術作品は「死への感情という影が具現化したもの」であると考えていた。彼は、製作当初の意味を喪失し博物館や美術館に収容された諸芸術作品に対し、「個々の文明における死に対する観念を表現したもの」という現代的意味を付与し、写真という手法を用い彼が創造するLe Musée imaginaireへと収容していく。このLe Musée imaginaireにおいて諸芸術作品は、時代、地域、文明の差異を超え、「人間と運命の関係を表現したもの」というテーマの下、統一される。また、マルローは芸術創造の目的は死に行く存在としての人間の条件、そして時間から人間を解放することにあると考えており、芸術作品は人間を無に帰す死から存在意義を勝ち取ろうとした人間の意志を表現したものであると考えている。芸術作品はマルローにとって、見る者に自らの運命に対する意識を喚起するものであり、運命を前に人間存在の意味を問いかけることで人間は自らの存在をより価値あるものにすることが出来ると彼は考えている。マルローが創造するLe Musée imaginaireは、芸術作品を通じて人間と運命の関係を模索する場なのである。

第2章では、Le Musée imaginaireにおいて諸芸術作品から共通の様式を見出すことを可能とする手段としての写真について考察している。マルローは、写真は絵画から派生したと考えている。写真は当初絵画と比べ下級なものとみなされていたが、フレーミング、照明など写真独自の手法を見出すことで新たな表現手法となった。そして被写体のモノクローム化により、芸術作品はその造形的特徴である凹凸や線を影として描き出されることによって、各々が属

するジャンルを超越し、その本質的意味を明らかにする。モノクローム化における造形の影による描写、そして照明という手法は、その製作過程において彫刻作品と共通しており、暗部を作り出すことで明部を表現する彫刻作品は、ネガ的存在であると言える。また、写真内存在へと変貌することで、被写体不在であってもその存在を見る者に認識させることが可能となり、一時的にではあるが時間の流れから被写体を解放する。芸術作品は写真となることで、現実の芸術作品から派生した「フィクションの芸術」へと変貌する。Le Musée imaginaireにおいては、芸術作品が保持しているとマルローが考えていた死に対する観念などを、写真が芸術作品に代わり見る者に訴えかけるのである。

また、マルローは小説作品においても写真を登場させている。登場人物Kyoを写した写真は彼の死後遺影となり、死後も写真を見る者に死者の保持していた死に対する観念を訴えかける。マルローは小説作品もまた、芸術論と同様に「人間と運命の関係」が本質的テーマであると語っており、小説作品内登場人物もまた、芸術作品のように写真となり、死に対する観念を見る者に訴えかけるフォルムとしてLe Musée imaginaireに収容されると考えられる。

第3章では、小説作品内登場人物における影の描写について考察している。マルローは落ち窪んだ頬や皺に生じる影を描写することによって、PerkenやGarineといった登場人物達の肉体的造形を表現している。この肉体の凹部に生じる影は、照明により強調される。また、登場人物達は作中で浮彫りなどの彫刻作品を連想させるものとして描かれており、マルローは彫刻、そしてモノクローム写真の手法により人物描写を行っていると考えられる。そして影により描き出される皺などは、時間の経過や病の痕跡であり、死に行く存在としての「人間の条件」を表現したものである。また、登場人物達はシルエットという影としても描かれている。このシルエットは登場人物の死に対する観念を象徴するものである。マルローは時間により否応なく死へと向かっていくことが人間の条件であると考えており、登場人物達の意識も時間に対して向けられている。シルエットにより象徴される死に対する観念とは、時間に対する観念とも言える。そしてシルエットは、肉体の造形を描き出す影となって受肉するが、この死に対する観念としての影の物質化は、「影」と表現されていた「死に対する観念が具現化したもの」が芸術作品であるという芸術論における考えに通じるものである。マルローは芸術創造の起源である影による再現表象に立ち返り、登場人物達のフォルムを創造したのである。しかし、死後の世界と結びついていた古代エジプト芸術等とは異なり、登場人物達の意識は死そのものに向けられている。マルローは現代欧州において、キリスト教は人間存在の意味を肯定する力を失っており、死は人間存在の無化を意味するものとなったと考えている。登場人物達は人間を無に帰す時間・死を克服し、自らの存在の意味を勝ち取るため行動する。マルローが描き出す登場人物達は、死に対する意識を内包し、人間と運命の関係を表現した彫刻的フォルムであると考えられる。そして登場人物達の死に対する観念は、彼らの死に際し肉体から乖離し、彼らを撮影した写真に宿り、死に対する観念を見る者に訴えかけるのである。

第4章では、小説作品世界における時間について考察している。

Les Conquérants、*La Condition humaine*は各章、各節の冒頭に日付、時刻が記載されている。この時間の流れと共に物語は推移していく。一方で、*La Condition humaine*では異なる時刻を示しながら動いている複数の時計が描かれている。これらが示す複数の時間は、個々の人間が持つ時間に対する意識を象徴している。しかし、人間がどのような意識を時間に対して持っていても、時間は人間の意識とは無関係に流れ続けている。Kyoの死後、彼の父Gisorsは太陽の昇降に象徴されるような、人間の力を超えた時間を発見する。人間はこの時間の中で生まれ、死んでいく。*La Condition humaine*はこのように時間に内包された物語である。また、*La Voie royale*には時刻に関する記載はないが、物語内ではヒンドゥー教的時間と輪廻のサイクルを象徴する輪が繰り返し描かれている。この輪にPerkenらを対峙させることでマルローは、ヒンドゥー教というインド思想との対比により、欧州的死に対する観念の独自性を描き出している。そして物語は天体的サイクルに内包されており、*La Voie royale*もまた、時間に内包された物語であると言える。このように小説作品世界は時間に内包されており、物語内登場人物達は時間・死に対し人間は何を為し得るかという問いから生まれたものである。その答えとしてマルローは、登場人物達を芸術作品に類するフォルムとして描き、更には写真内のフォルムへと変貌させるのである。

以上のように、小説、芸術論双方において死、そして時間は一貫したテーマであったと考えられる。時間の支配下にある人間が自身の存在の意味を勝ち取るためには何が出来るかという問いに対する答えを、マルローは芸術に求めたのである。彼は芸術創造の起源である影による再現表象に回帰し、影を描くことで小説作品内登場人物という現代欧州の人間を表現したフォルムを創造していったと考えられる。そしてこのフォルムを時間から解放するために、彼は人物達を写真世界内の存在へと変貌させる。そして芸術論において彼は異なる時代、文明における芸術作品に目を向け、これらを撮影した写真を収集した、人間と運命の関係を模索する場・Le Musée imaginaireを創造する。小説作品内フォルム、芸術作品は共に、死に対する観念を表現したものというテーマの下統一され、芸術創造という人間が死や時間に対して持つ力を、読者である我々に語りかけるのである。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　井上　俊博　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	准教授	高階　早苗
	副 査	教授	貴志　雅之
	副 査	教授	藤平　シルヴィ
	副 査	教授	青野　繁治
	副 査	教授	和田　章男

論文審査の結果の要旨

本論文は、アンドレ・マルロー作品中、これまで個別に扱われてきた小説作品と芸術論に関して、両者に共通する「影によるエクリチュール」というテーマに着目し、マルローの創作の根幹をなす思想を明らかにしようとしたものである。芸術論の一つの題名でもあり、芸術論全体の様相を示す Le Musee Imaginaire という用語は、これまで「空想美術館」と訳されてきたが、imaginaire（空想の）という形容詞はimage（図像）という名詞から派生したものであり、芸術作品を実物ではなく写真として収めることによって、歴史的文化的背景から解放し、本質的な特徴のみを際立たせるというマルローの意図がそこに込められている。論者は影によって描かれた図像である写真による芸術論と、影による描写を重要な場面で多用する小説を取り上げ、「影」の中に、マルローの作品創造の主眼である「死に対する観念」「運命」「人間の条件」などに対する思想が現れていることを分析している。

第１章ではマルローの芸術論の中でも、ファイユームにおいてミイラに取り付けられた肖像画が取り上げられる。それは、死後の世界を持たないローマ芸術のレアリスムを継承しながら、同時に古代エジプトの影響も受け、「死に対する観念」を表現するものとなっている。つまり実体の背後に影が存在するように、ミイラや肖像画は「死に対する観念」を背負った器であるとされる。そしてそれは製作者側からのみでなく、見る者が自らの運命を問う契機となるものでもある。

第２章では芸術作品が写真となることで、歴史的文化的背景から切り離され、その本質である「死に対する観念」を訴えかけるフォルムのみが残されることが示される。又、小説における遺影としての写真について分析される。遺影となった登場人物は、生身の諸条件を失うのと引き換えに、自らの「死に対する観念」のみを載せたフォルムへと変貌する。

第３章では『王道』『征服者』『人間の条件』といった小説の中の「影」に関する描写が分析されている。シルエット、鏡像、彫刻的表現によって描かれた人物は、第２章での遺影への変貌と同様に、生きた肉体から、それぞれの「死に対する観念」を表現するひとつのフォルムへと変貌を遂げるのである。

第４章では「時間」に関する描写が考察される。芸術論においても小説においても西洋と東洋は対比されるが、分析されている３作品はいずれも東洋における征服者たる西洋人の物語であり、ヒンドゥー教に代表されるような天体的サイクルの時間が支配する世界で、西洋人である主人公達がいかにして死や時間の支配に立ち向かうかが描かれている。

レリーフの起源とされるブタデスの娘の逸話において、娘は旅立つ青年の姿を、ランプの光のせいで壁に投げかけられた輪郭をなぞってその姿をとどめようとした。芸術論においても小説においてもマルローが描いたのはこの影によるフォルムへの変貌であり、芸術論だけでなく小説群も又、「死に対する観念」言い換えれば「人間と世界、そして運命との関係」を表現したフォルムが集められた Musee Imaginaire なのである。そこでは訪れる者＝作品を読む者に対し、芸術作品もしくは登場人物のフォルムが時を超えて語りかけ、又、訪れる者もそれらフォルムに向けて、そして自らに向けて問いを発することになる。

以上が論文の要旨であるが、そこに出てくる「影」の意味は多様であり、分析においても、論文として文章で説明する段階においても繊細な作業が必要とされる。その意味では本論文はいまだ改良の余地があるとはいえ、マルローの創造の最も重要な問題を、独創的でいて本質的な切り口から解明しようとした力作であり、テクストの細かな分析においても鋭い指摘が数多くみられた。今回、あまりにも煩雑になるために触れなかった作品や派生的テーマを加えることで、「影」を中心に据えた筆者独自のマルロー研究は、今後もおおいに発展することが期待される。

以上審査の結果、本委員会は本論文が博士（言語文化学）の学位に相応しい業績であると判断した。